

今を楽しむ強さ

映画「39窃盗団」の押田兄弟

ダウン症の青年・押田^{きよたか}清剛が主演するコメディ映画「39（サンキュー）窃盗団」（押田興将^{こうしやう}監督）が那覇市の桜坂劇場で公開されている。ダウン症のキヨタカ役の清剛、その兄ヒロシ役の押田大は共に監督の実弟。押田監督は「キヨタカはダメ男だがチャーミング。その面白さを出すにはドキュメンタリーでは難しい」とコメディーとして撮った経緯を語る。

オレオレ詐欺の主犯格・ケンジ（斎藤歩）に「心神喪失者の行為は罰しない」と定める刑法39条を理由に悪事をそそのかされたヒロシは、キヨタカ、幼なじみの和代（山田キヌヲ）と泥棒の旅に出る。明るい展開の随所に、障がい者を取り巻く厳しい現実が顔をのぞかせる。

大は劇中では発達障がいの役柄。押田監督は当事者への取材

を通し「親も認識しないまま社会に出て、累犯障がい者となった人もいる。経験をうまく蓄積できず、世の中で生きるスキルを持ちづらい人が多くいること



「39窃盗団」の押田興将監督（右）と主演の押田清剛＝那覇市の桜坂劇場

がわかった。そこを触らずにキヨタカを描くことはできなかった」と語る。

ダウン症や発達障がいの人々を「僕らは不幸なことを予測すると今の飯がまずくなる。彼らは周囲から見て不幸な状況にいても今を楽しむことができる。映画を通してその強さに学び、心の強度を増してもらえたらうれしい」と望む。

脚本は押田監督が清剛の動きを読んで書いた。リハーサルはせず、清剛の動きに周囲の役者が合わせて撮影。思いがけず象徴的な場面も撮れたという。雪の中でも撮影し、清剛は「寒くて大変」と言いつつ「楽しかった」と振り返った。

「近所の人がキヨタカを指して『こういう方』と言う場面があるが、名前を呼んで関係を築けば不安におびえないシステムを自分たちで作っていける。有用なのはコミュニケーション」と強調しつつ「障がい者の映画と聞くと構えてしまうかもしれないが、まずは映画を見て笑ってほしい」と呼び掛けた。